

【房総きのこ今昔】

大和田建樹著『漫筆紀行 志たわらび』

(金港堂書籍、明治35年7月10日発行)

内田 龍哉 (千葉県立中央博物館)

大和田建樹おおわ だたけきは、明治前期に活躍した高名の文人で、幸田露伴・饗庭篁村・幸堂得知らとともに「根岸派」と称された(注1)。

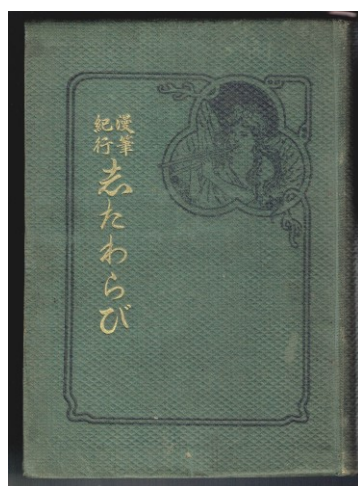
彼らはわが国近代小説のパイオニアであると同時に、明治20年代から急速に発展しつつあった国内幹線鉄道網を活用した紀行作家としても知られ、特に大和田は『鉄道唱歌』の作詞で名を馳せた。

この短編は、紀行文集『漫筆紀行 志たわらび』に収められた「初茸狩り」を翻刻したもので、明治30年(1897)～34年(1901)の間に行われた成田町近郊でのキノコ狩りの記録。文中に時季は明記されていないが、スズムシ・クツワムシが鳴く時季であり、かつ初茸の収穫期にはやや早いと文中の人物に語らせていることから察せられたい。茸狩りの山林には、これを管理しているらしき「一軒屋」があり、入山者の収穫を把握していること、各種のキノコの収穫摘期を把握していること、同家の家人(嫁娘)もキノコ狩りに習熟していること、食用に適さないキノコについて作者に注意喚起する人物がキノコ狩りに同行した11名の中にいること(嫁娘か)、などが窺われる。

また、同書には新勝寺の節分会の様を描いた「節分詣」と題する一文も収められている。

(注1)根岸派：根岸短歌会を中心とする正岡子規・高浜虚子らの短歌の流派とは異なる。大和田らの根岸派は、尾崎紅葉らの「硯友社」と文壇の人気を二分した。

- * - * - * -



初茸狩

稲は何くも色づきわたりて⁽¹⁾。⁽²⁾瀛車の内。豊年の話ならぬはなし。名もなき道の小草まで。秋おもしろく咲きいでたるをながめつゝ。千葉佐倉など打ち過ぐる程に。日は暮れたり。月あらば興更キョウサラにそひぬべきを。暗なるはなほよし。雲かさなりて雨景色なるを如何にせん。されども道のかたへには。鈴虫も鳴きぬ。響虫クツワムシも鳴きぬ。美しき石炭の火花は⁽³⁾。螢となりてぞ飛び亂るゝ。

成田にておる人⁽⁴⁾。我外^{ワガホカ}にもいと多し。宿屋よりは女いで。口々に宿れ^{／＼}と呼ぶ。おのれは茸狩^{ヨココ}にて。招かれたる石井氏に至れば⁽⁵⁾。いたく歡びてもてなさるゝほどに。夜も更けぬ。あるじは謠好^{ウタイ}む人なれば。吟じつゝけて餘念なく。わが教子^{オシエゴ}なる乙女子^{オトメゴ}は。歌書など廣げて筆^{タビネ}もてあそぶも⁽⁶⁾。旅寐^{タビネ}おぼえぬ夜半なりけり。

まどろむ間もなく夜は明けたるに。思ひきや庭の飛石ぬれるならんとは。糸の如き雨は。今なほ薄^{ススキ}に玉を貫かせてぞ降り^{クヤ}みたる。口惜^{クチ}しとも口惜^{チオ}し。

さはいへ此町に來ながら。不動尊に詣でずして歸られんやとて⁽⁷⁾。乙女子うちつれて出づる程に。降りやみぬ。寺はまだ靜^{シズカ}にて。店の物買ふ參詣人もなく。やゝ黄ばまんとする梢の色こそ秋めきたれ。

おりのぼる鳩の羽風に寺山の

秋の葉ひとつこぼれきにけり

うしろの山に登りて。梅の木蔭に。散りにし春の面影を忍ぶほどに。御堂には笙^{ショウヒチリキ}箏^{コエ}などの聲おこる。ゆかしくて急ぎゆかんとするに。雨また降りいでゝわびしければ。名殘^{ナゴリ}をしくも聲きゝながら。石段を下る。乙女子に問へば。御護摩の始まれるならんといへり。

石井氏より丁稚きたりて。雨傘を渡しゝかば。わが蝙蝠傘と取りかへたるに。雨また止みぬ。定めなきは。今の世の人心のみかは。

させば晴れ^{ツク}曇れば又も降りいでゝ

傘もてあそぶ秋の雨かな

いかに^{／＼}と。空ばかり仰ぐほどに。眞晝^{マヒル}にもなりぬ。

ぬれぬとも山わけ入らん今朝の雨に

かさ打ちひろげ待ちもこそすれ

思ひ立たずやと促したるに。あるじ心よく賛成して。車を命^{ベントウ}じ辨當^{ベントウ}を詰めさせなど。早くも用

意は整ひたり。おの^{／＼}ぬるゝ覺悟にて。湯かた足袋はだしの輕^{ヨソイ}き装となり。車におくられて町を出づ。

小さき籠に檜の葉を敷き。初茸五つ六つ入れたるが。柿栗と共に店に並びたるは。今日の得物の標本めきて。先づ頼^マもし。鎌と籠とを手に^{／＼}持ちて。かなたより來るは。先鞭^{モクセイ}つけたる朝山の歸りか⁽⁸⁾。木屋なつかしく。何くよりか風にかをる。

一里半ばかりも行き。森の下道に入る。薄はいやが上に生ひ茂りて。露いと多く。雨ます^{／＼}暗し。車をおりて掻き拂ひつゝゆけば。氷よりもつめたき雫は。時々^{／＼}に楠よりこぼれて顔を打つ。

石井氏の心やすくする一軒屋を訪ひて。初茸狩^コに來れるよしを語れば。あるじの翁は。雪より白^{ヒゲ}き髯を撫でつゝ。また十日も早かるべし。されども今日山に入りて。檜茸^{オオザル}を大箆^{オオザル}に一つ取りて來つるものもあれば。何かは取るゝならん。などいふ。檜茸とは如何なる形したるものぞと問へば。其嫁なる人。茄子と一つに煮たれば。色は黒けれども召しあがりてよとて。皿に煮つけて出だしたり。しめじに似て味やゝ淡く。齒切れ極めてよし。

さらば行き見て見んとて。更にぬるゝ仕度をなし。手に手に籠と鎌とを携へ出づれば。かの翁さしづしつゝ。汝もゆくべし貴様もゆけとて。嫁も娘も案内者として附けくれたり。我等四人に。車夫まで加へて十一人の同勢。鼻唄うたひつれつゝ雨中の茸狩をなさんとす。勇氣は凜たり。松の下露も物の數^{カズ}かは。

有^アつたといふ聲。はやくも栗林のかなたに響きぬ。さては先んぜられたり^{／＼}とて。急ぎ野菊を踏みしだきゆけば。こゝにも一つといふ聲。又もやうしろの方より響く。初茸こゝろなし。などでか我ために居所を告げざる。

薄紅の光みつけて取らんとすれば。雨にぬれたる落葉なりしも悔しきに。我ふみすてたる跡をさがして。乙女は二つぞ見いだしける。おくれじ我もとて。一つを籠に入れんとせしに。そは食はれぬぞと。笑はれし時の腹立たしさ。かゝる菌は。我ゆく道に立ち居らずしてもあるべきに。さはいへ。あさり／＼て五つ六つは取りたり。今は日もやゝ暮れんとすれば。心は残れど。いざなひつれて。又かの一軒屋に歸りぬ。雨しづかに^{ケム}烟りて。庭の柿の^ミ實のぬれたるも美し。歸るさは夜に入りて。道もいとあしく。互に押しつ押しされつして。車の進みも早からず。町につきたるは八時にやありけん⁽⁹⁾。客よぶ女の聲も今宵は聞えず。店の^{カエ}燈のほのぐらきが。ぬれたる道に影を散らせり。

歸りて今日の得物を^{ナラ}并べ見たれば。大きな^ミ箕と。大廣蓋を満たすだけの數なりき。さるにても乙女の片腕に^{ハズ}だに。及ばざりし事の耻かしさよ。又の日は^{アカツキ}曉に起きて。一番の^{アカツキ}瀛車に乗らんとせしに⁽¹⁰⁾。出でゆく煙を。目の前に見ながら後れたり。雨は寒し。次の^{タタ}發車には時間あれば。眠れる茶屋を^{カマド}敲き起して。暫く休む。烟は^{カマド}籠より登りて。茶も湧きたるさまなれば。朝飯あつらへたるに。初茸の^{アツモノ}羹そへて持ち出でたり⁽¹¹⁾。是も名残のもてなしとやいはまし。瀛車からうじて出でぬ。見かへる岡山松おほし。又こん秋もと⁽¹²⁾。石井氏のいひしはあのあたりならん。

をとめ子が折りてくれたる山里の

木の實に秋のいろは見えけり

秋の色。秋の聲。いたるところに我を待てども。昨日の楽しさくりかへすは。又いつの時にか。

【注釈】

- (1) ルビ：原文にルビなし。カタカナ表記のルビは、読解の便のため、翻刻者の判断で現代仮名遣いで付したものの
- (2) 作者は今日でいう句点（、）と読点（。）を混用している
- (3) 石炭の火花：蒸気機関車から放たれる火花のことか
- (4) 成田：成田鐵道の成田驛は、明治30年（1987）1月19日に開業
- (5) 石井氏：大和田作品に頻出する成田町在住の素封家、商人か
- (6) 乙女子：『紀行文集 旅路』（明治39年発行）に「石井しげ子」とある
- (7) 不動尊：成田山新勝寺のこと
- (8) 朝山：あさやま／朝の山狩り
- (9) 町：成田町をさす
- (10) 一番の瀛車：成田駅から早々に帰京する、の意
- (11) 羹：あつもの／肉と野菜を入れて煮た吸い物の意
- (12) 又こん秋も：「また来よう、秋も」の意